

『紡ぐ』

2020.8./ 第9号
発行 教育相談室「あした塾」

元気があつなげる 笑顔



今、宍木町のあちこちに、笑顔の女の子をイメージした黄色いポスターが貼られています。新型コロナウイルスの感染拡大で自粛生活を余儀なくされ、元気を保ちていく町を、ちゃんと、活気がある、元気が出る所に戻したいという願いを込めた取り組みなのです。

「宍木町ふれあいワークサロン」に集まる商店街の人たちや住民の皆さんが制作し、広めています。これだ、どうやっていくか、おぼたわりません。でも、みんなを心をなで、笑顔を忘れずに頑張っているおもしろい！「明けぬ夜は長い」です。必ず、出口が見えてきます。(ポスターづくりは吉村商店さんに問い合わせを。)

(中居郵便局にも貼ってあります。)

街中のふゆき

わけてきます。集落によつて、もう人数より多くいます。困りました！

「今年は、ほんとに、さう

キジの鳴き声、聞かぬ〜。」散散いなの、安心して住める環境にたつてきたのか…。この「雉」宍木町の鳥、ほんとだね。宍木町の「花」「川」「木」あそこそと大いにしたいと…。

「明子寺の鎌倉屋敷、きいんに

なっていたよ！」さびたです。地元の人たちなの、さう、とちやわわりません。これを、2度になつて、きいんにしてあったこと。ごきよう様です。町にとつても大事な財産です。みんなを守っていかなく…と思ひますね。



(栗林で見つけたキジ)

これ見て！



6月下旬、早朝6時半のことだそう。道場へ行く、あつて写真撮ったものの、親ノシキちびとちびヤブに隠れるおどろきをさせていたため、とても恐れおそれた。し、親といふのは、動物であつて、ちびのため…。(木原地区で、Kさん)

穴水再発見

比良 法泉寺の御物石器



「蹟は法泉寺の裏山にある比良遺跡です。縄文遺跡です。『御物石器』が出土した頃は田んぼや畑だったようですが、今は、大部分が草木におおわれています。

甲行末未未

突然、電話がかかってきました。甲の加太は比古神社の記事を見て、現地に行ってみたいとのことでした。

門前のご夫婦でした。「おじいちゃん、甲の人たちは、とても親切だったと喜びと感謝の電話でした。お水さん。」

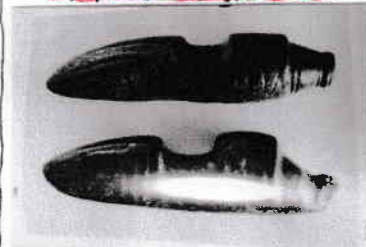


「おぼろげ百物語」(橋本伊佐次編著)の中に、「石のゴイのおきもの」というお話が収録されています。これは、比良の法泉寺の裏山の田んぼで見つけた「ゴイのおきもの」のよう形石を東本願寺門跡にさしあげたお話です。(別掲)

その後、この石器は、1878(明治11)年に、明治天皇が東海北陸を巡幸されたとき、本願寺を介して明治天皇に献上されました。この石器が帝室御物とされたことで、「御物石器」と呼ばれるようになったとのこと。

比良の法泉寺を訪ねては良祐之任職から、お話を聴き、いろいろお土産を見せてもういきました。その中に献上されたものと似た物がありました。残念ながら、両端が欠けており、完全な形ではありませんでした。特別に感銘をおぼえました。

御物石器2点



御物は国立博物館に、一度だけお水に持って来たことあるそうです。

なお「御物石器」のレプリカが穴水町歴史民俗資料館にあります。比良、法泉寺、資料館など一度訪れてみてはどうですか？(比良祐之任職、お水と共にご覧ください。)

石のゴイのおきもの

明治の初めのある日、土野畑で仕事をしていたおぼろさん、変形をした石を2つ見つけました。おぼろさんには、それが「ゴイのおきもの」に見えました。

そんなある日、東本願寺門跡(一門の法跡)が奥能登にやってきました。おぼろさんは病気を癒していたので、門跡に会いに来て、この石のゴイをおぼろさんに持っていき、「門跡さま、この石のゴイを私の気持ちとして受け取ってください。」と渡したそうです。...

(橋本伊佐次編著「おぼろ百物語」より)

◎法泉寺所蔵の御物石器は町指定有形文化財に指定されています。